

特64

276

せ

い

ぐ

ら

わ

ら

ひ

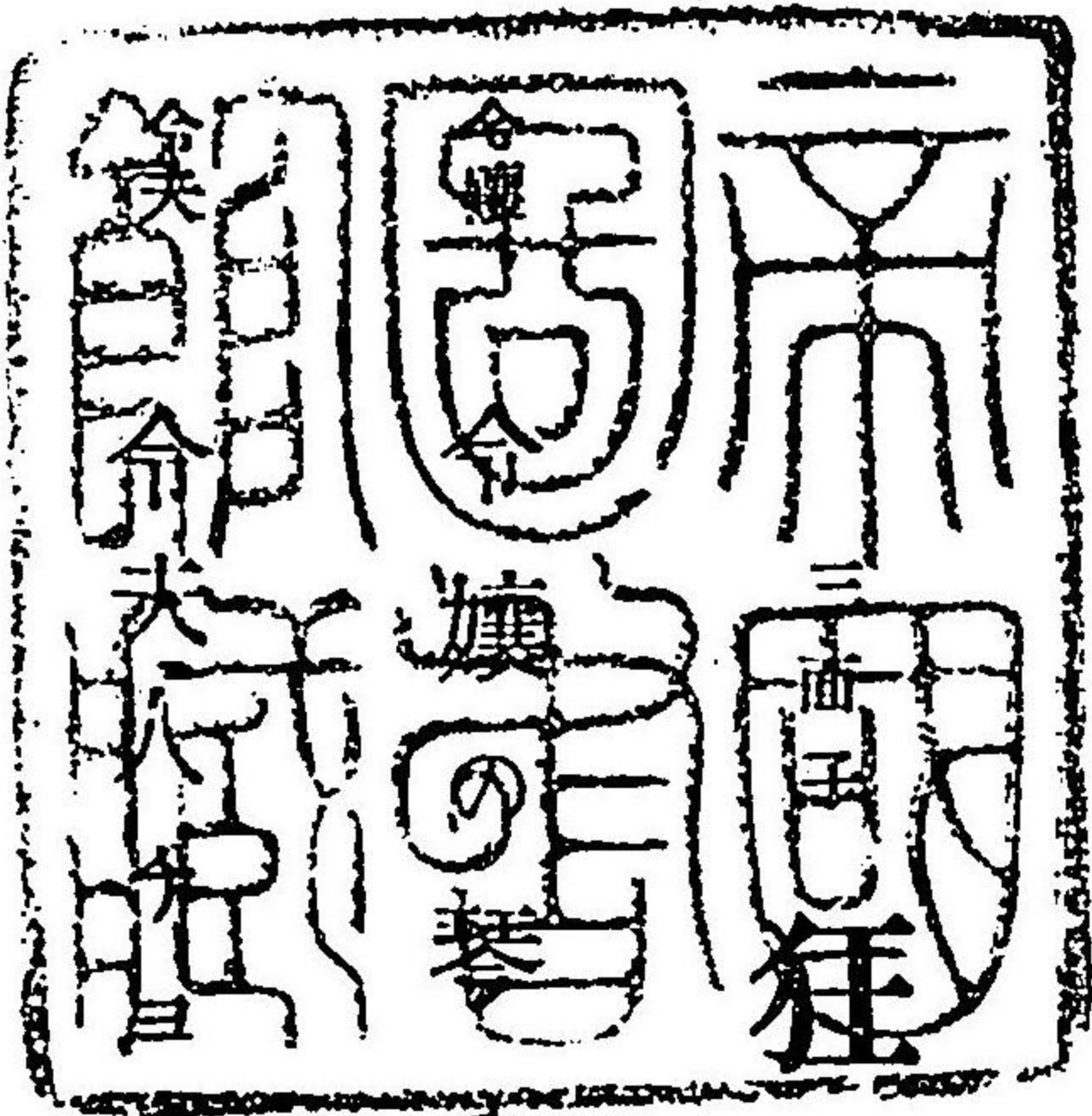
三

面

子

く  
た  
さ  
れ  
た  
く  
い





句集

(其二)

英語も孕む

いと好いのが供に居



令夫人乳母に來られて愚にかへる

華族 從五位様やれ射的たのピアノたの

高襟 名を呼ばれ五體からだをどむく高襟ハイカラア

其中うちて米利堅メリケンカラア下直げちきなり

英吉利で育つたそ、うて字が書けず

海老茶 海老茶でも氣耻きばうかといが色を變へ

膝頭ひざがしら嗅ぐ様に海老茶氷水みづを吞のみ

いつまでも學問をする面つらに出來

身を投げた夢で海老茶の母は泣き

女學生よく君僕といはぬなり

其中に海老茶結なぞとひねりたす

學力で式部は父も云ひくるめ



女學生つれのあるたけ横に行き

角帽

角帽を見て呉れるかと氣を配り

角帽は三年目から髭ひげをつけ

畫工

肖にすぎたと畫工女の相を變へ

モデル

ツレくと顔見て畫家はいやがられ

モデル

妾メカケではないとモデルにのみこませ

音楽家

音楽家れ厨子くしの様な箱を下け

たんと水呑むは演説まづいなり

演説家

演説家龍頭蛇尾の聲が涸かれ

喝采かつさいでへボ演説をたツ潰つぶし



速記者はミエに休んで顔を上げ

馬丁はハツピの裾を背負つて駈け

馬丁は馬草を飲んで追ン出され

赤毛布 底ぬけの桶で水さあ運ぶたよ

壯士 五十錢、壯士は處女で終るなり

居酒屋で壯士旦那と崇められ

壯士黨あいた履くのが作法也

長者議員祖父が爪の餘光なり

議員 シャンパンをいラムネたと議員云ひ

紳士 會社員派手に遣ふは詐偽師也



羽織はゴロの小唄こぶたもかなり上手也  
なりあがり紳士は書畫を買たがり  
でも紳士ぶぞろな膳で飯を出し

看護婦

看護婦の縁義に生ける返り咲き  
看護婦に女房カラんた禮を云ひ

被衣びいを脱いで看護婦俗になり

藥劑師

藥劑師一味の藥くすりわるく云ひ

教授

どこかヌケて居るを教授のミエにする

視學

掃除した跡へ視學ハヌーツと來る

郡視學妻はた寺の娘なり



學士 新學士先づ從七位の髭ひげが生へ

新學士龍頭蛇尾の腰を曲まげ

十才の神童學士にて終おしまり

博士 博士揮毫を望のぞまれ僕はあの何です

學位獲るまでは無闇につつかより

博士號爾來ヒツソリ音もせず

辯護士

官許のゴロツキ辯護士と銘をうち

馬鹿と無慈悲が辯護士の倉をたて

考古家

オランダの尿びん考古家をツと賣り

摺鉢の破片かと考古家たゝきつけ



其初摺鉢の破片ひろつて來

三面記者 三面記者路次を歩いて嫌がらせ

三面記者 三面記者ぎつと藝者の名を覚え

三面記者 よくない事を長く書き

三面記者 面白可笑しく引きのぼし

三面記者 自由自在に嘘をつき

文士 學問と金のないのが文士なり

小説家 面炮の様に………を入れ

新兵 新兵は狙橋で道をさし

新兵は帽子を脱いで道をさし



警官の究所くは國訛な

囚人 前科者既決へまはりのびくく

囚人は禮と云はれて粉をはたき

外役の娑婆珍らしく右顧左盼

清書の差入鬼の目に涙なり

新俳優

新俳優フリをけなして詩を吟じ

新俳優よく柔術を使ふなり

アイス

高利貸オドリをまけて妾めかけに

高利貸ノベの指輪に總入齒

車 膝掛に漣切なみのある辻車



提燈の股火に更かす辻車  
辻車自用らしいを選つて乗り  
ヨボくの車夫大聲に談しかけ  
相箱はヨボクタ爺に引きずられ  
職工はツホン、マンテル高アシダ

職工

外国人 銃と烟管もつて韓兵出征し

ステ、ユの様な手つきで褌を取り  
フロイライン(處女)五十とさいて興がさめ  
女唐人女の様な気がしねい  
異人の子足を出したがいいたいけな



何々嬢娘といへば娘なり

三太夫

三太夫御意に御座るで事はすみ

三太夫れ氣に入りのは酒も飲み

廣告

廣告屋面白そくな渡世なり

(かまぼこや面白そくな渡世なり 古人)

圓曲に墮胎藥の廣告と

書生

高利借親睦會の指圖する

雪隠で書生當入うつて見る

高利借マンマと試験落第と

ヤア失敬ヤア失敬で事は濟み

ステツキの強そくに打つ花の枝



寄席がへり都々一などをやつて見る  
書生引越ランプ持つて教導す  
式部に横目先生に禮をかき  
借金ハエンゲージして濟す氣也  
學資金二割は牛ぎゅうと寄席へ消へ

洋妾 異人帳といふが出雲で別に出來

鳥指 鳥指の放鳥にする鳥をさし

翠丸の邊ですゞめは四苦八苦(苦々)

鳥指は朦朧として辻に立ち

坊ン立 立ン坊の珍味はパンの魚田なり

救世軍 救世軍氣違じみたひろめ様

近眼 近視眼、眼鏡はづせば目を細め

近視眼眼鏡はづせばすこくなる

緑日の植木屋 植木屋はまける前には舌打ち

五六間行けばまけたと手を敲き

女教員 女先生引き立て役にうまれ付

小役人 受附は役人がつた口を利

役人は下になる程威張るなり

へボ官吏役徳の氣で威張る也

小役人相手次第に威張り替へ



受附は名刺次第の腰をまけ

ヨカくヨカくは腰でフザケて目でスマシ

寫眞 見合のと知つて寫眞屋念を入れ

顔違する程うまく寫すなり

どうしてもれ寫眞の方はねちますよ

時計

輕便に出來て時計はシバラレ(入質る

時計の狂つた會社必ず事務亂みたる

破産前時計もロクに巻かぬ也

緩爐

改良ストーブ室内を屁臭くし

電車

席讓ゆつるへき優物が乗の車つて來ず

席を譲つてそれからザロリくも也  
 ゼンツルメン席を譲らんと待つて居る  
 斟酌をすれば野郎が腰をかけ  
 已れに席ゆづれどハスハねめ廻し  
 席ゆづる奴があるのぞつけ上り

大門と讀んで南へ持つてかれ  
 乗客は『モ一少々』で窄み出と

汽車

夜の汽車横に坐禪を組んで寐る  
 機關車は出がけに一ツ噓する  
 狸寐で三人前の席を盗り



手革袍を載せて人には坐まらせず

白切符目につく所へ挿して行き

居ゐないくバアーと箱根を越える也

停車場ステーション戀こと無常むじやうか十重じゅうじゅう二十重にじゅうじゅう

日記帳 日記帳末になる程ザツと書き

日記帳末半年は白紙なり

日記帳當坐は菜の値ねまでつけ

別荘 本宅を借りて別荘買つて置き

電話 役所の電話小面の憎い口を利き

ね談中嘘うそと知つても是非がない

高帽 シルクハット布呂ホロを俛出くぐつて一ツぶち

ハンモク ハンモクで膝の邊へんまでチラつかせ

落ちそいで落ちずハンモクと旅順港

講義録 講義録大改良八分位は紙型なり

下宿屋 雑作に込めて下宿屋客を賣り

新聞 新聞は八分の嘘うそで客をひき

小新聞 恐喝おどろでやつと存續し

夏帽子 夏帽子色揚いろあをして黄ばみ過すぎ

海水浴 ナグラ受け損そんねて磯いそへツンノメリ

大ナグラ 小僧向ふへツイと拔ぬけ



それ來いと大平洋を胸で受け

狂體俳句  
秋

芋の露翻れかけてはすべり込み

雷世を去つて稻妻後家をたて

青ふくべ鉢はち合あはせする初嵐

女めたなばた買手の知れぬ機はたを織り

白露は蝶が末期の一とづく

朝霧の塀から息子むすこかへる也

明月の芋喰ひすぎて寐そびれる

徘徊師見様見真似に秋を好すき

籾入はまた實の入らぬ栗をもぎ

洒涙兩織女はデレてフテ寐をこ

牛乳 クリームを捨て、牛乳<sup>ミルク</sup>を滋養がり

毛巾 ハンケチの絹のは口の蓋<sup>ふた</sup>になり

ハンケチは鼻をかむのを別に持ち

手袋 手袋<sup>てぶくろ</sup>を脱<sup>ぬ</sup>いてハイカラ指をなで

靴下 靴下の踵<sup>かかと</sup>愚妻の耻を出こ

自転車 乙<sup>つば</sup>鳥<sup>くろ</sup>の様に自転車町を駈<sup>か</sup>け

ゴロゴロツバサリ自転車乗<sup>の</sup>り習ひ

束髪 地毛と見せ實は束髪入毛なり

洋食 焼小鳥カチンくと皿を切り



ナイフは話<sup>す</sup>めるなど小聲でそつと云ひ  
れでりたと聞いてメニューを讀直し  
またあるをツイと取られるレストラン

露店

惜<sup>た</sup>氣なく露<sup>ろ</sup>店<sup>てん</sup>のランプシンを出し  
露<sup>は</sup>店<sup>み</sup>は黄金佛を混<sup>ま</sup>ぜて置き

烟草屋

烟草店ひとりものとも思はれず  
烟草店中實のあるは三分なり  
でもといふ内職にする烟草店  
孫の供唱歌を二ツ三ツねほへ  
辨當が生徒を下ける幼稚園

幼稚園に細工にする豆をたべ

牛肉 犬は馬馬は牛にてとほるなり

牛肉屋肋骨のあるは無残なり

生剥の逆剥の肉店へ釣り

焼鳥 百ひろは鳥の香で車夫を呼び

シヤンパンはたのが錢ては吞まぬなり

シヤンパンは身錢て飲まぬ様に出来

展覧會 特別室湯文字の様に幕を張り

特別室ワがあるのかと氣をまはし

ヴェナスは特別室に遁世し



ヴェナスは日本へ来て湯文字をし

裸美人の腰を巻ませて氣をゆませ

郵便

復讐にウンと封じて先き拂ひ

水道

水道になつて會議を短縮し

栓せんの水飲まんと面つらへオツカブリ

水道もいゝか水瓜が冷せぬい

共用栓たまる間はフケを搔かき

玉炎

六三のゲームで一里半歩ちよき

玉臺たまたいで打うつて耻骨ちこつに熱あつをもち

玉運拙く翠丸をつきはづし

パノラマ パノラマはダンスの様な家に居る

パノラマは能が、りにて這入るなり

夫婦とも見へずパノラマ館へ入り

活人齋 活人畫蚕のに喰はれてムツ／＼と

活人畫 絶體絶命の噫くさめをこ

旅(正月) 其年のつき初はつをする。嘘うその旅

二年越嘘の續いた旅行なり

公園 公園のブランコ牛乳屋選手也

劍舞 九天に奏えて劍舞オツつぶれ

詩吟 遠吠の様に月落ち鳥啼き



宴會

親睦會舊知己ばかり親睦を

二次會の手合喧嘩の前に消へ

幹事當惑巻いてる奴と寝てる奴

謡曲

クリ入にまつ小半年うなされる

中氣かと聞けは謡曲に夢中なり

獵

不獵さは人の手柄を買つて來る

不獵には好きな獲物が軒に居る

家扶曰く鶉一羽が五六圓

箱根

混浴の禁止箱根の客が減り

もげそろに耳をはたいて弓に懲り

引き習なまひ左手ひだりの裏うらがはれあがり

金的かねをポスと射貫やいて大笑おほはらわひ

キラ星きらぼしの様に射返やへ穴あながあき

衛生せいせいのいゝがあんまり孕なみ過ぎ

銅婚式どうこんしき位くらいで五人子持ごにんこぢなり

子持

銅婚式位どうこんしきで五人子持ごにんこぢなり

見世物

見世物屋幕みやげものをあけては食くづかせ

解散

解散かいさんは高利貸たかりかの方が先まへ知り

選舉

我馬鹿わればかを三圓さんげんに賣うる投票紙とうひょうし

干涉かんじやうはせぬと身方みかたは放任ほうにんと



保險 保險金長命ながいきするが損になる

保險火災それはまアね目出度う

試験 身を刻きむ様に試験の時がたち

あてにしたら問題は出ず落第し

廢嫡 廢嫡と決し身受の沙汰も止み

勘當が廢嫡てーのかと親父云ひ

掘出物 掘出さう出さうといつも掘出され

掘出され物を道具屋仕込んで來

掘出さずともいゝ御身分て掘出され

洋行 洋行の雪隠ブマの間屋なり



ya く ど nen が 法 螺 の 初 なり

辨當屋のメニュー右から先へ讀み

禁酒會 禁酒會五分は元來飲めぬ奴

慈善會 慈善會遣ひはたして二分のこり

社會主義 社會主義持參貰つて立消へる

詠史

御坐船の周圍海月と紙が浮き

三度目の嫁入常盤の氣が知れず

草や木の歌ばかりよむ源三位

神農はすゝさを甜めて舌をきり

大洪水鳥やさかなに助けられ



四五帖は身に覺ある書さッ振り  
 日の丸か外それて與市は要かなめを射  
 扇のまど七三ほどの賭かひが出来  
 爪つめを脱はして孔明はホツと息  
 三韓へ別べつ誂あつらへの洞を召し

伯夷叔齊摺り餌えの様な糞ふんをたれ  
 いやさ蓑笠と道灌念を押し  
 忠度は茶代のいらぬ宿をとり  
 蚤いばのあと搔かきく千代は二句よみ  
 檀ノ浦男ばかりが化けて出る

横車押した報て蟹に成り  
める足が出来たと阿古屋客か落  
壁の土拂いて何の本たろう  
石山の所化覗ひたと追ン出され  
源平は繪になる様に戦を

とりまきに日が戻つたとれたてられ

野雪隠、關羽は鬚を首へ卷

この怠墮者と牛若くらはされ

牛若は尻を狙はれ山を出る

伏木から出て切無屁の詮議なり



久米仙は獨<sup>ど</sup>鉗<sup>こ</sup>の湯なご知らぬ也  
 取<sup>と</sup>止<sup>と</sup>もなごに清盛出世をし  
 よりく兄の子さがす後三年  
 巴御前手鞠をめで洞をつけ  
 猪の早太尻<sup>し</sup>を嚙<sup>か</sup>まれて飛上り

れ加減はなご、忠宗油断させ  
 皇帝か濟<sup>す</sup>んで蘆生は欠<sup>あ</sup>伸<sup>く</sup>をし  
 皇帝が覺めて蘆生は肱<sup>ひ</sup>をかき  
 道節も未塾な中は火<sup>や</sup>傷<sup>け</sup>をし  
 河童 スツポンに細工をしたが河童なり

カンガルカンガルは子宮を腹の外へつけ

舊題二括 内々ないの儲内々もち消へてゆき

いゝ夫つまか出来ようと和歌を習ふなり

(友が子を喪ひたるを悼む 二句)

乳ちがあまりねシメが残り涙なり

風車かざぐるままた泣きたさに捨てられず

不精な信心は四万六千にち

浄玻璃じようはりにキマリの悪わるひ繪が映うつり

待つてくれ待たぬと駒を押へつけ

吹降りの裾と湯文字がカラミあい

わるい風女の體をうねくらせ



貧乏は馬鹿金持はまづ泥棒

四五目は負のうちへは入れぬなり

田樂は齒でうけてからソツと抜き

(京都疎水)

船頭が寐る間に船を山を越へ

何の藝も出来て縁遠い不器量さ

雨舎り後から来たは遠慮がち

雨舎り用事の先をたづねあひ

雨舎り馬骨牛骨名乗りあひ

雨舎り立小便は出来てゝろ

門松のあと春の未練が五六寸

たくり膳こぼれた物は一寸喰ひ

綿帽子人の悪いは覗きこみ

遣羽子が幌に留つてチヨイとく

口開いて待つ枝豆が鼻へそれ

神佛は人の功德で家が出来

坐敷着に變はるばかりの首をすけ  
 握飯うけて地藏は辻に立  
 花の枝性懲りも無く塵芥をさけ(舌?)  
 歌骨牌れもひの種の疵が出来  
 かすがひが泣いて喧嘩も下火なり



夫婦喧嘩小言こごになれは仕舞なり  
行水ぎょうすいのね煙草盆たばこ小供の髪かみに粉こながふき  
單獨とどでたべる小供の鼻はなに飯いがつき  
菜さいが無なくなつてから子供飯こどもいにする  
文明は畫心えしんのないう戦いくさする

葬式むすびの頭かぶの方は派手はでに出來  
葬禮むすびのこつばの方かたの不法ふぽう法ぽうさ  
傳馬でんばの船頭ふね船ふね椽ぐらを夜よ這はふなり  
まづ蠅あぶらが喰くつて夫おつとから客きやくが喰くひ  
他人たにんたけ斷念あきらのいゝ事ことを云いひ

泣きそくな事を言つては悔むなり  
消炭を喰つて秋刀魚をはき出  
川開き紺屋の人玉などを揚げ  
古今集よく讀人が知れぬ也  
二三服さぐりに醫者は服のませて見

かきわけて焼香いそぐ會葬者  
會葬のアタフタ急ぐれ焼香  
愛相のないのは白い湯文字なり  
あはれッほく按摩は笛に節をつけ  
無邪氣たと云ふのも戀の手たてなり



アイくといふまで仲居手をたゝま

せいろくが結句乞食にしてかへし

おへん(無い)事おへん(無い)と仲居腹を立て

(眉山長男を擧げたる時 二句)

盆栽は襦袢たしめの蔭かげに氷つて居

サア御覽なさいと産婆キンを見せ

身代を下女は車上でオツパサミ

五六人生んで十人並に痩せ

身たしなみ残のこりの花にいろをつけ

物思ひブツかる方へファイとよけ

ボツタラ焼こつからこつちアタイのよ

先生は十日以上勝たぬなり

屠蘇 赤ン坊に屠蘇アラ貴方あなたに廢あきらと遊あそばせよ

屠蘇は嫌いやと次男蒲鉾かぶにガブリゆき

長男は母の殘あました屠蘇も飲み

仲人なこうとの身構みかまで妻屠蘇をつぎ

ナル口くちは眞似まねをしようと屠蘇を受け

初雪

黒い雪が降りもしまいと復またモグリ

町内は百鬼夜行か雪を搔かき

眞向まっこうにうつむいて來てヒヨイとよけ

角々かどへ犬は片足見せて行き



角々へ犬は覺をかけて行き  
 日露戦争 一突に腰が碎けて露艦北へ  
 上陸をするはくと北へ行き  
 鹵獲した火薬鍵屋へ拂下け  
 黒木軍摩天嶺から角とうち

旅港敵艦

アイタ、と露艦逃廻り  
 山蔭へすくめば曲射面ン！と來  
 巨砲揚げて浮き巨穴あきて沈む  
 露艦曰く長生すれば耻多し  
 潮加減艦首見へたり隠れたり

烟突の周圍海月がフワァリ〜

明治三十八年一月五日印刷  
明治三十八年一月八日發行



編輯兼  
發行者

江草斧太郎

神田區一ツ橋通町七番地

印刷者

松澤 垣三

麴町區下六番町十七番地

印刷所

同勞舍活版所

麴町區下六番町十七番地

有斐閣書房

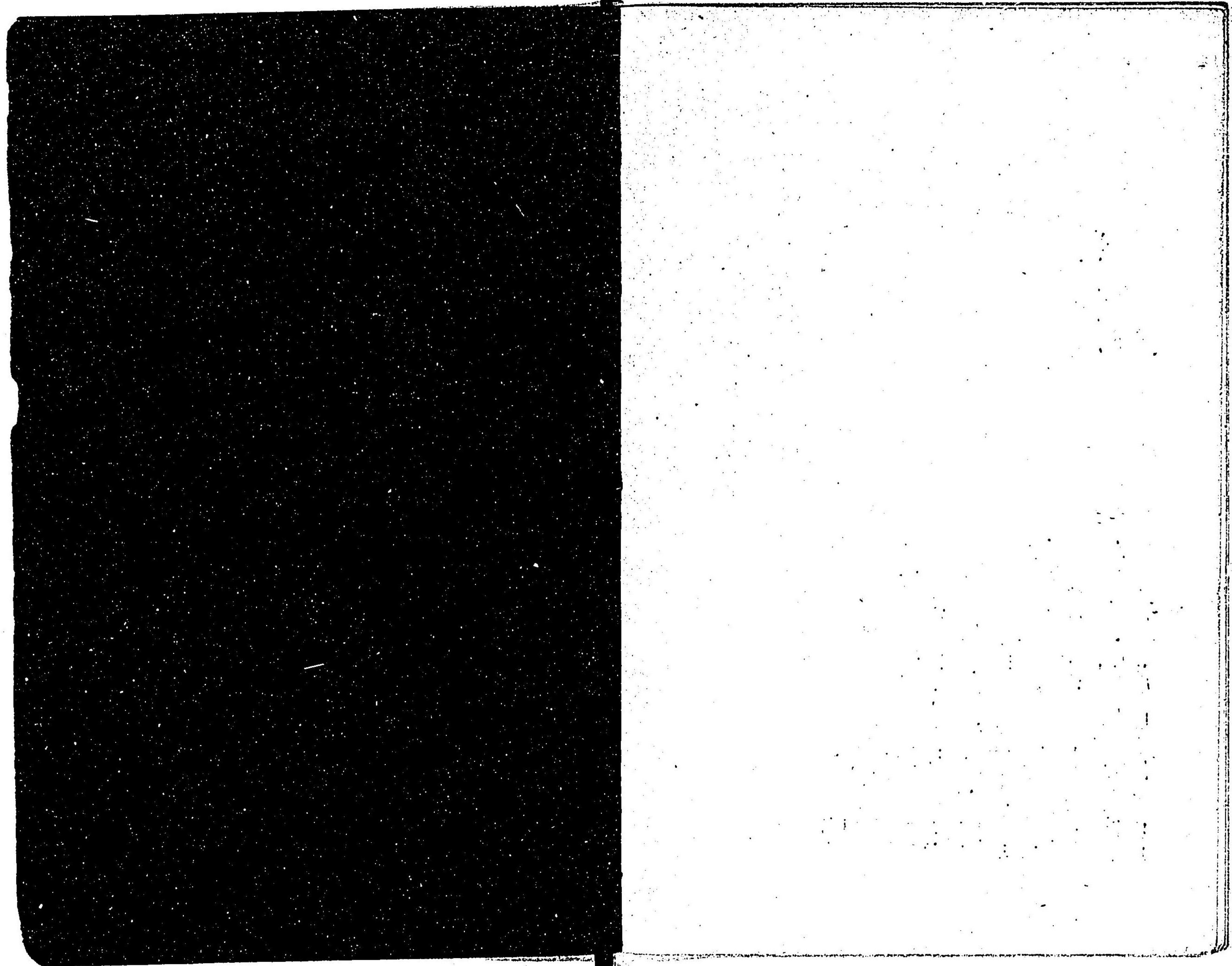
神田區一ツ橋通町七番地三、四號地

有斐閣雜誌店

神田區一ツ橋通町七番地五號地

發行所







4  
6



087750-000-9

特64-276

狂句集 1

有斐閣

M38

DBF-0064



223  
615

特  
2